

あゝ隼戦闘隊

かえらざる撃墜王

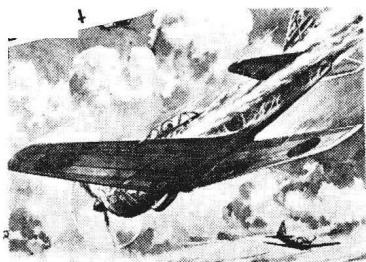


黒江保彦

あゝ隼戦闘隊

かえらざる撃墜王

黒江保彦



光人社刊



あゝ隼戦闘隊 かえらざる撃墜王

昭和42年1月1日 第1刷

450円

昭和42年2月3日 第5刷

著 者 黒 江 保 彦

発行者 川 島 裕

発行所 株式会社 光 人 社

東京都千代田区西神田2-25

電話・東京(265)8661(代表)

振替東京54693番

本文印刷・弘済印刷株式会社

色彩印刷・写真製版株式会社

製本・松栄堂製本所

乱丁・落丁のものは本社またはお買求めの書店でお取りかえ致します

撃墜の瞬間

——前線の黒江大尉

戦時中のことである。私は空中戦で敵機の撃墜される実況を、映画に撮影しようと計画した。その当時、私は報道班員で、航空作戦の記録映画を製作していた。私はその方法については、確信をもっていた。しかし、だれが撮影するかが重大な問題であった。

私はその頃、ビルマの第五飛行師団に配属になっていた。撃墜場面の撮影を、師団の緒方情報主任参謀や情報の大貝大尉に相談した。計画については、すぐに賛成をしてもらえた。しかし、一瞬を争う激しい空中戦のさなかに、映画の撮影のできるほど、余裕と技量のある戦闘機操縦者はいないだろうというのだ。

私はラングーン郊外のミンガラトン飛行場に行つて、戦闘隊の指揮所で、この計画を話してみた。戦闘機の操縦者たちは、命にかかわることだと、浮かぬ顔をしていた。すると、
「それはおもしろいな。おれがやってやる」

と、あっさりいった、ふとった、大柄な将校がいた。それが黒江保彦大尉だった。

戦隊の操縦者たちが酒を飲むと、きまって合唱する歌があった。東宝映画の『加藤隼戦隊』の主題歌であった。私ができることをいうと、戦隊機乗りの男どもは、バカ笑いをした。

「うちの戦隊歌だよ。黒江大尉がつくったんだ」

私は、専門家の作った主題歌とばかり思いこんでいた。それほどすぐれていた。

その黒江大尉が、優秀な戦隊機乗りで、すでに十数機の撃墜の記録をもっていると聞いて、私はおどろいて、畏敬のおもいを新たにしました。しかし、すでに親しくなっていたので、彼にむかって、ほめるかわりに冗談をいった。

「黒江さんのからだは、よく操縦席におさまりますね」

彼はらしくに笑って答えた。

「おれも心配しているんだ。隼の足は細いからね」

その次におどろいたのは、この本——『あゝ隼戦隊』の一部の原型となった彼の著書を読んだ時である。記述が正確で詳細というだけではない。戦隊機操縦者の心理が実によく出ている。とくに空中戦闘の描写がすぐれている。太平洋戦争中の航空作戦の戦記として、これ以上のものはない。

この著書の不満をいえば、田中友道少将の描写があまいことだ。この飛行団長は、毎夜乱酔しては、自分の宿舎に慰安婦を呼ばせた。翌日は、酒くさいいきをはきながら、飛行団の将兵をなぐりつけていた。異常な人物だった。

黒江大尉にたのんだ撮影は成功した。カメラは翼内の前方にとりつけ、機関砲の発射ボタンで連動してまわすようにした。英軍のホーカー・ハリケーン戦隊機が白煙をふきだすが、あざ

やかに撮影されていた。黒江機はあくまでも追撃をつづけた。ハリケーンはふりきろうとして追いつめられ、大地に激突して炎上した。みごとな撃墜であった。それをカメラは終わりまでとらえていた。

これが私のビルマ航空作戦記録映画の、もっともすぐれた画面となった。

昭和四十一年 師走

高木 俊朗

目次

第一章 遙かなる雲の墓標

初めに別れあり……………	13
祖国よさようなら……………	15
青春の血はたぎる……………	17
運を天にまかせて……………	19
いざ決戦の空へ……………	22
今給黎機の最後……………	25
ドン爆か戦闘機か……………	29
あゝわが戦友たち……………	33
罪、万死に値す……………	37
死に急ぐこと勿れ……………	39
追いつめた敵機……………	42
忘れ得ぬ大空中戦……………	47
敵にささげる祈り……………	60
“おやじバンザイ”……………	67
さようなら南寧……………	70

第二章 大空を駆けるとき

男の友情に泣く……………	72
友よ安らかに眠れ……………	75

第三章 君死に給うこと勿れ

勇者ついに還らず……………	77
荒々しい模範飛行……………	82
新しい転任命令……………	85
孤独な死への飛行……………	91
眠られぬ夜は更けて……………	95
決戦の南の空へ……………	99
不吉な数字の鐘馗……………	103
あゝ勝利の横転……………	106
一撃撃墜ならず……………	116
いのちある限りを……………	121
ふれ合う心と心……………	137
あゝ快男子あり……………	140

第四章

散りゆく花の末に

隼は征く雲の果て……………	144
勇者の泣くとき……………	152
大空ははかなし……………	162
戦場の鉄のオキテ……………	168
なみだの空中戦……………	173
白雲に消えた二機……………	177

第五章

火網の中に身を晒すとき

敵をおそるる勿れ……………	183
忍びがたき命令……………	192
まぼろしの空中戦……………	200

相つぐ悲報の中で……………	209
“掩護ゴクロウサン”……………	218
天われに味方せず……………	223
身がわりの二人……………	233
激戦のアカヤブへ……………	238

第六章

あゝ還り来ぬ強者たちよ

黒いかえり血……………	241
ある敵の指揮官……………	248
喰うか喰われるか……………	251
モスキートを追え……………	258
ある奇妙な体験……………	263
必殺捨身の四文字……………	267
強敵P51現わる……………	272
凱歌は上がりたり……………	281

わが兄 保彦のこと

黒江 豊……………

インド上空に想う……………	287
迫りくる死の影……………	291
むなしき空中戦……………	297
ビルマを去る日……………	301
わが兄 保彦のこと……………	309

あゝ隼戦闘隊

かえらざる撃墜王

写真提供 林 重男、野沢誠一郎
および 月刊雑誌「丸」編集部

第一章 遙かなる雲の墓標

初めに別れあり

「黒江さん！ 黒江さん」

どこかで私の名を呼ぶ声がある。

——だれだろう。確かに私の名を呼んだぞ。

その日、昭和二十八年十一月三日、文化の日であった。

新橋から田村町に向かって、雑踏の中を歩いていて私を呼びとめる声は、舗道の傍に急ブレーキをかけて止まったタクシーの運転席からであった。忽ち、転げ落ちるように男がとび出してきた。

おお、何たる奇遇——。

加藤隼戦闘隊の名のもとに、共にビルマの空を縦横無尽に駆けめぐり、息つく暇もなく戦いつづけた当時の機付整

備長、小柄なその体躯、忘れもしない逆井繁之軍曹ではないか。

「やあ……隊長！ 隊長！ 生きていましたか。……会いたかったです」

彼はいきなり私に抱きついてきた。

「ようーッ。どうしていた？ 元気が、元気が。……よくわかったもんだねえ」

二人はガッシと抱き合って、お互いの背中を痛いほど叩き合った。道行く人々の眼も忘れて——。

相逢わざること十年——私は思わず空を仰いだ。静かに晴れわたった大空のどこからか、いまにも飛行機の黒点がポツと生まれてくるような気がする……。

エンジンの音 轟々と

隼は行く 雲の果て

翼に輝やく 日の丸と

胸に描きし 赤鷲の

しるしは吾等が 戦闘機

十年一昔とはいいが、私たちの胸には、あの頃のことを生き生きとして蘇ってくるのである。

思い出の若人たち、強者たち。相逢う嬉しきは、人間と人間がぶつかり合って結んだ血の通ったあの当時の友情である。

見よアラカンの山越えて

大ヒマラヤの峰の果て

ベンガル湾の波遠く

進む決死の陸鷲が

あぐる凱歌の勝ちどきに

交わす血潮のその誓い

私の回想は、昭和十三年にさかのぼる。

その頃、日本は中国大陸に大きな戦を進めていた。とうし陸軍は、上海の激戦から、杭州湾の敵前上陸を決行しあの有名な「日軍百万杭州湾上陸」のアドバルーンの宣伝文句からもうかがえるように、その精銳は無人の野を行くかのように南京を陥としいれ、揚子江ぞいに、西へ奥地へと蒋介石を追いつめていた。

陸海の航空部隊は、地上部隊の進撃に呼応して、連日、敵陣を爆撃し、ときには奥地に飛んで、都市や飛行場の攻撃、交通線破壊の任務についていた。日本の力は急速にの

び、軍は毎日のように聞く、勝利の報に酔って、日一日と増強されていた。

十月のはじめ、武漢三鎮（武昌・漢口・漢陽の三都市）も日本軍の占領するところとなり、内地では勝利を祝う「ちょうちん行列」がつづいていた。

ちょうどそのころ私は、戦闘機乗りの基本コースを終え実施部隊への配属がきまっていた。晴れて陸軍航空兵少尉である。私の血は沸々と湧き立っていた。祖国の危急存亡のときに、よしんば下手くそで、まだくちばしの黄色いヒヨコのような鳥人であろうとも、自分は国運を担う者の一人であるという大きな自負心が、なんの不自然さもなく、私の心の中に宿っていたのである。

なんの心配も、なんの野心も、なんのこだわりもなかった。飲み、食い、よく寝て飛行場に出たら、まったく一心不乱、青空の中にとけこみ、白い雲を縫って馳けめぐる。心の中には、つねに勝利の行進曲と、闘志の円舞曲が鳴りつづけていた。

ある日のことだった。私の手に一枚の辞令がとどけられた。

『飛行第五十九戦隊付を命ず』

私は躍り上がらんばかりによるこんだ。なぜなら、五十